

二 音楽取調掛員

この項の資料は自筆による『舊職員履歴書』を中心として、音楽取調掛および東京音楽学校の在職中に關する資料に限った。

伊澤修二（いさわ しゅうじ） 長野県士族、音楽取調掛長・東京音楽学校初代校長

伊澤修二に關しては音楽取調掛の事業すべてが彼の資料となるので、ここでは履歴書のみに留める。



アメリカ留学当時の伊澤修二
写真提供者 Dr. Bruce D. Wilson,
Curator ABA Research Center
Hornbake Library, University
of Maryland

履歴（要約）

嘉永四年（一八五二）六月二十九日信濃国上伊那郡高遠町に於て生る。
幼年より旧高遠藩学校進徳館に入り和漢の學問を修め後同校教員及寮長となる。

明治三年（一八七〇）高遠藩貢進生に選ばれ大學南校に入り同校の科程を修める。

同五年（一八七二）九月三日文部省（十一等）に出仕し第一中學監事を命ぜられたるにより退學す。

同八年（一八七五）六月十九日愛知師範學校長に任命される。七月八日米國に派遣せられ同國麻沙士^{マサチューセッツ}州官立ブリッジワートル師範學校へ入り師範學科を修める。

同十年（一八七七）七月卒業、次いでハーバルト大學に入り理學諸科を修める。

同十一年（一八七八）明治九年調査のマサチューセッツ州教育制度調査の結果を『米國學校法』と題して文部省より出版。四月八日「學校唱歌に用ふべき音楽取調の事業に着手すべき見込書」を目賀田種太郎と連名にて文部大輔田中不二磨に上申す。五月二十一日アメリカより帰國。六月「唱歌法取調書」および「掛圖解説」を文部省へ提出。六月十七日東京師範學校へ雇われる、一ヶ月金九拾圓宛交付。八月二十三日文部省學務課兼務。十月十六日東京師範學校長補を嘱される。十月二十五日文部省内に体操傳習所を創設、「新体操法実施」についての構想を発表。

同十二年（一八七九）三月八日音楽傳習所設置の意見を發表。三月二十二日東京師範學校長の任を嘱され一ヶ月金百圓交付される。九月新体操法実施の成績報告書を提出。十月七日文部省内に音楽取調掛を創設、御用掛を申し付けられる。十月三十日音楽取調に付見込書を文部省郷寺島宗則へ提出。

同十三年（一八八〇）四月アメリカより恩師メーソンを迎え、取調事業に着手。

同十四年（一八八一）六月二日任文部少書記官。八月三十日叙従六位。十月二十六日音楽取調掛長を仰せ付けられる。

同十五年（一八八二）一月音楽取調事務大要を作成して福岡文部郷に上申する。四月會計局副長を免ぜられ、編輯局副長を仰せ付けられる。

同十七年（一八八四）九月十五日秋田山形兩縣下學事巡視。

同十八年（一八八五）四月三十日任文部權大書記官。六月五日叙正六位。

同十九年（一八八六）三月三日任文部省編輯局長。四月十日叙奏任官二

等。

同二十一年（一八八八）一月二十七日兼任東京音樂學校長、叙奏任官二等。

同二十二年（一八八九）十一月二十九日大日本帝國憲法發布記念章受領。

同二十三年（一八九〇）二月十一日國家教育社を創立。六月六日東京盲啞

學校長兼任を仰せ付けられる（九月十日まで）、叙奏任官一等。

十一月二十九日奏樂堂において「帝國議會開院」につき祝辭を述べる。

十二月二十六日叙勲六等賜瑞宝章。

同二十四年（一八九一）六月十三日東京音樂學校長非職を命じられる。翌日辭表提出。

伊澤修二氏非職となりし理由

去る十二日の事とか芝紅葉館にて大木文部大臣新任披露の宴會を開かれたる際伊澤修二氏は文部省が從來統一を缺ける所以を直言して大木新大臣に其の弊を改められたしとの希望を述べたるに何か言葉の行掛りより辻文部次官との口問答となり果ては互に腕力にも及ばんずる勢なりしに其の座に居合す人々は頻りに双方をなだめ其の場は一先づ無事に治まりし由なりしが翌日伊澤氏は音樂學校に在りて何心なく稽古を始め居たる際大臣の秘書官より前夜酔中の過言と辻次官に謝すべしとの注意を書面にて送り越したるを元來一徹の伊澤氏なれば容易に之を承引く様子もなく直ちに内閣に赴き大木大臣に面會を求めしも已に退出の後なりければ更に其の官宅に赴き色を正して滿腔の不平を吐露し殊に小學令若くは小學校設備準則の如きは僅々二三人の秘密會議にて決したるものゆゑ他日地方より伺ひ出る疑点に對しての指令も省中の人々其解釋を異にするより自ら指令の精神まち／＼に流れ如何とも爲し難きに至るべし云々と滔々と述

べ出でたるに大木大臣は夫は兎も角暫くは現今の地位に勉強し吳ずやと慰諭する處ありしも伊澤氏は斷じて彼等とは椅子を並べ難しと答へて立ち歸りたるに其翌日に至り終ひ非職の沙汰を蒙るに至りたりと云

（『讀賣新聞』明治二十四年六月十七日）

伊澤修二は一般の誤解を解くため『國家教育』第十号（明治二十四年七月十二日、社員通信の欄、三十五〜三十六頁）にその真相を寄稿した。

本社長伊澤修二氏通信

客月十三日小生非職の儀に付早速諸君より御見舞被下深く奉謝候右に付種々御問合の次第も有之候へ共一々御回答も難致に付先以當時往復の書面を左に掲げ御一覽に入れ申候

六月十三日午後六時頃非職の辭令を領せし際小生より辻新次氏に送りたる書面は左の如し

拜啓仕候陳は小生儀今日非職被命候閣下には年來御厚誼相蒙り候處近來教育事業統一の點に就き意見を異にするに至りたるは誠に遺憾の至りに御座候乍併小生教育上の素志は從來と毫も異なる所無之候間不相變御交際被下候はゞ大幸の至りに御座候敬具其翌十四日辻氏より一封の回答書を送られたり今同氏の承諾を得て其本文を左に掲ぐ

拜見貴君今般非職を被命候に付御懇書を領し所謝に候然る所貴君には年來別して御厚誼を蒙り居候に付甚だ遺憾の至りに御座候得共職務上不得止儀如何とも致し方無之候併向後とも不相變御交際被下何事も御心添被下度切に希望仕候先は貴酬迄早々下悉

右の往復文御照覽被下候は、辻氏と小生とは全く公務上の點に就き意見を異にしたる次第にて教育上の私交に就ては少も従前と異なり候事無之は明瞭に候間諸君にも宜く御諒察被下度候條其後十六日朝に至り國會新聞、都新聞、東京新報等に小生非職に關する顛末なりとて記載せし事項相見候其中東京新報に掲載せし記事の如きは大に事實を誤りたるものと認め候に付早速永井久一郎氏に宛て右記事は大に事實を誤り小生一身上の迷惑も不少且去る十三日午後大木文部大臣に面謁直に意見上陳候節同大臣の應答に據るも小生非職の理由は右記事の如き次第に無之は明白と被存候へは何卒十分事實を明にするの効力ある方法を以て右取消の御處置相成間敷哉否ざれば不得止小生より逐一の顛末を公示するの外無之と存候旨を申送候處同日午後永井氏より回答ありて文部省より非職の理由を新聞紙上に記載せしむる儀は難相成小生に於ても非職に關する顛末等を公示することは難出來筋と考られ候申來候

右の如き次第に付小生當時の顛末を通報致し候事は德義上慎まざるを得ざる儀と存候間乍遺憾詳細の事情は難申上候間宣布御推察被成下度候頓首

東京音楽学校を退いてのち、二十五年（一八九二）三月『小學唱歌集』全六冊を出版した。翌二十六年、伊澤修二の薰陶を受けた教え子有志は彼に紀念章を贈った。それは表面に天の岩戸鶏鳴の図、裏面は楽器と花紋を彫刻した直径六センチ余りの金牌である（『音楽雑誌』第二十九号、明治二十六年二月）。

明治二十八年（一八九五）五月伊澤は台湾に渡った。台湾總督府学務部長として、同地の日本語（国語）教育に力を入れ、『日清字音鑑』『日

台小字典』などを編集した。三十年（一八九七）貴族院議員。三十六年（一九〇三）樂石社を創立（英語音、支那語音、台灣語伝習、視話法、吃音矯正、方言矯正、啞子発音等諸科伝習規則を設けて、希望者を訓練する機関）、以後貴族院議員としての活躍と並行して台灣教育および吃音・聾啞者の矯正事業に生涯を投じた。大正六年（一九一七）五月三日脳出血のため没す。六十七歳。昭和十三年（一九三八）四月、長野県上伊那郡高遠町の生家前に、東京音楽学校同声会によって「伊澤修二先生出生之地」という碑が建てられた。

伊澤修二著（訳・編）書目録

- 『教授眞法初篇』（輯訳） 明治八年十月二十四日
- 『生種原始論』（翻訳） Huxley's Lectures on Origin of Species 明治十二年十二月
- 『學校管理法 正編』 明治十五年八月
- （續編） 明治十五年九月・正續合卷 明治十五年十月
- 『教育學 上卷』 明治十五年九月
- （下卷） 明治十六年四月・上下合卷 明治十六年十二月
- “Director of the Institute of Music” 明治十七年二月
- 『小學唱歌集』（編輯）三卷（ほかに『唱歌略説』） 明治十四年十一月～十七年三月
- 『進化原論』（翻訳） 明治二十二年
- 『音楽取調成績申報要略』（編輯） 明治二十四年三月二十七日
- 『帝國憲法圖解』 明治二十四年四月
- 『聖諭大全』（編輯）全四卷 明治二十五年九月～二十七年十一月
- 『生理的心理新説 上卷』 明治三十二年（下卷は未刊）
- 『日清字音鑑』 明治二十八年六月
- 『日台小字典』（編輯） 明治三十一年十二月
- 『視話法』 明治三十四年四月二十九日
- 『觀語清國官話韻鏡及同意字解説書』 明治三十七年十二月

(このほか『視話音韻新論』『視話東北發音矯正法』)

『同文新字典』(漢字統一會編) 明治四十一年八月

『發音會話篇』 明治四十二年七月

『視話讀法』 明治四十二年八月十二日

『視話國語正音法』 明治四十三年六月

『吃音通信矯正傳習』 明治四十四年

(このほか『國定小學讀本正讀法』『吃音矯正練習書』)

『支那語正音練習書』 大正四年八月

『支那語正音發微』 大正四年十月

『視話支那語正音韻鏡』 大正五年三月

『視話支那語正音法』 大正六年四月

その他、教科書(『小學唱歌』『小學讀本』など十八種)、校閲本二十四種

昭和十四年十一月二十四、五の両日、奏樂堂において教育音楽研究大会が行われ、その二日目の午後伊澤多喜男、鈴木米次郎、永井幸次の三名によって伊澤修二の思い出が語られた。次の談話はその抄録である。

人間伊澤修二の素顔を垣間見る思いがする。また明治十年代から二十年代にかけての東京音楽学校の状況をつかむことのできる貴重な資料である。

伊澤多喜男(明治二年～昭和二十四年〔一八六九～一九四九〕は十人兄弟(姉妹)の第九子、修二は第三子で修二からみると下から二番目の弟である。台湾総督、東京市長、勅選貴族院議員として政界で活躍した。

鈴木米次郎(明治元年～昭和十五年〔一八六八～一九四〇〕)は明治二十一年(一八八八)東京音楽学校を卒業、東京師範学校の教師を経て二十六年から三十七年まで東京音楽学校の教務嘱託となった。

永井幸次(明治七年～昭和四十年〔一八七四～一九六五〕)は明治二十九年(一八九六)東京音楽学校専修部を卒業、静岡師範学校、鳥取中学校教諭を経て大阪に居を定め、大正四年十月大阪音楽学校を設立、同学

校の校長として大阪の音楽文化向上に尽力した。「関西音楽界の父」と称されている。

貴族院議員 伊澤多喜男

〔前略〕修二は私の兄でありますけれども、實際は親のやうな關係であります。私の父が早く歿くなりましたので、私は殆ど子供の時からして修二に育てられたのであります。私と修二とは十八年も違ふのであります。では明治八年に父に伴はれて、さうして修二の在職して居る名古屋に出たのであります。其時に修二は官立の愛知師範学校の校長をして居りました。明治七年からでありますけれども、私の参つたのは八年であります。其時に私の多少音楽に關係する記憶と云ふものを申し上げれば、私は丁度七つの年と記憶します。兎に角其の愛知師範学校に私は入つたのであります。そこで私は初めて学校で唱歌と云ふものを習つたのです。唱歌と云ふ名前であつたかどうか記憶しませんが、唱歌と云ふものを習つたのは明治八年に愛知師範学校の附屬小學校の子供として習ひましたのが初め。それはどう云ふものかと云へば、「蝶々、蝶々菜の花に止まれ」斯う云ふ歌であります。之を私は愛知師範学校の附屬の子供として習つた。是は甚だ可笑しいのですけれども、私は子供の頃からどうも音楽の天才であつたらしいのです。能く姉の背に負ぶさつて……、貧乏士族の子ですからして、姉の背中に負ぶさつて、さうして頻りと姉が當時の俗謡など歌ふのを小さな三つ四つ頃からして直きに覚えて、さうして眞似して居たものさうです。で今のやうな事で、明治八年頃兄の所へ行つて兎に角學校で歌を教へられたと云ふことですからして大變に得意であつたらしいのです。其の時分の事を申し上げますと云ふと、一體侍ひと云ひますか士族と云ひますものは、歌を歌ふと云ふやうな事は非常に擯斥されたものです。彼奴はどうも歌を歌ふ、丸で話にならんぢやないか。是がまア其の當時の考へ方です。一體學校で歌を歌ふのは何の爲だらう、歌を歌ふのは藝者か賣笑婦でなくては歌はないものだと思つて非常に卑しんだ次第です。是は日本が一體どうしてさう云ふ風になつたかと云ふことは色々研究しなければならぬ

事だと思ひますれども、孔子が禮樂を以て世を治めると云ふことを云つて居られたに拘らず、當時の封建時代と云ふものは非常に禮樂と云ひますが、音樂或はもう少し普通の言葉で云へば、歌を歌ふとか三味線を弾くとか云ふことは墮落の極だ、斯う云ふ風に考へた。今でもさう云ふ考へをする人が相當に多いと思ひます。さう云ふ時代に、私の兄が學校に唱歌と云ふものを持つて來たのは明治七年です。現に私はそれを習つた。さう云ふ事實を御話します。

それから兄は明治七年八年愛知師範學校の校長をして居りましたが、まア當時の政府に認められまして、さうして教育學科取調と云ふ命を受けましてアメリカへ派遣されました。それは留學ではありません。要するに教育の學科と云ふ事は教育制度と云ふ風に申した方が宜いか知れませんが、何と云つたか、傳記の中に書いてありませうが、兎に角教育制度の取調と云ふ名前を掲げましてアメリカに派遣されました。さうして其の時目賀田種太郎君なども一緒に行かれたのであります。目賀田君は留學生の監督に行かれました。私の兄は學生ではありません、役人であります。役人として教育取調の爲に派遣されたのであります。さうして教育を取調べると云ふことの爲には高等師範學校に入れば宜しいと云ふ風に考へて、それでブリツヂオーターの師範學校に入つたのであります。其時に音樂以外の學科は常に先づ一番か二番位の非常に好い成績でありました。所が音樂だけは丸きり點數を附けられん、要するに音樂と云ふことに就ては丸きり理解が無い。それでどうしたかと云ふと、日本人は音樂と云ふものに就ては全く無能力であるからして、お前は氣の毒だからして音樂の學科は免除してやると云ふことを云はれたのであります。彼は非常に残念がつて、さうして何とかして自分は他と同じやうな扱ひを受けたいと非常な努力をしたのであります。非常に努力をしてさうして兎に角先づ相當の成績を音樂に於ても擧げて立派に學校は卒業しましたが、其の時に私の兄を指導して呉れたのはメーソンと云ふ先生です。此の方が非常に立派な音樂教育家であつたのであります。音樂家であつたかどうか知りませんが、音樂教育家で兄は此のメーソンと云ふ人に指導されて、實に立派な教育家だと云ふ風に考へ

まして後日日本へ同氏を招聘したのであります。さうして日本人と云ふものは丸で音樂に附ては無力だと云ふことはない、又所謂情操教育から云つて音樂と云ふものは非常に大事だ、先刻云つた禮樂を以て世を治めると云ふことから云つても非常に大事だと云ふので、非常に音樂と云ふ事に就て熱を持つたのであります。

そこで明治十一年でありますか内地に歸つて參りました。さうして今日の高等師範學校の教頭のやうな地位に就いたのであります。所謂アメリカ歸りの非常に教育の研究をして來た人間でありますからして、當時非常に重要視されたのであります。それで今日の師範教育と云ひますか、先づ其の創始者と云ふのは私の兄であります。

で茲で申上げますが、私の兄は、私から申すと烏滸しいのですけれども、所謂物の創造、クリエートすると云ふことに就ては非常な偉い人だと思つて居るのであります。例へば音樂、例へば體操、例へば聾啞教育、例へば師範教育は無論の事でありますが、それから國民精神教育外地の教育即ち臺灣教育とか、兎に角教育と云ふ方面から行きまして各方面の事は私の兄が全部創始したと云ふ風に私は申して差支へないと思ひます。晩年になつて今の吃音矯正と云ふやうな事もやりましたが、是は彼のやつた仕事の内の實は一端で、是は所謂音韻學と云ふものゝ一つの適用と申しますかアツプリケーションに過ぎない。世の中では伊澤修二と云ふと、何か吃音矯正の先生のやうに考へて居る者がありますが、左様なものではありません。ほんの音韻學の一端の現はれで、吃音矯正と云ふやうな事は唯一つの現はれで、東北などの訛音矯正、訛の矯正と云ふやうな事。それから尙ほ擴がつて行きました、私の兄が終ひ迄熱心にやつたと云ふことは所謂人類愛と云ひますか、其の現はれと思ふのであります。どう云語の統一を圖ること、是は私の兄が數十年努力した事であります。どう云ふ動機であるかと云へば、誥り支那と云ふものは四百餘州で四億の民衆が居る。所が支那人がお互に話をしようと思ふ時に九で話が出來ない。例へば福建の者と廣東の者とは言葉が違ふので話が出來ない。北の者と南の者は無論出來ない。彼等が互に話をする時には英語を使つて居ると云ふ。

誠に氣の毒千萬な事です。是は支那の四億の人が氣の毒である、何とかして支那に持つて行つて基礎的にスタンダードランゲージと云ふものを與へたいと云ふことを私の兄が考へて居つた。それが自分が非常な長い二十數年間の時を費し、さうして甚だ金持ではなかつたのですけれども、自分の私財を投じて支那人とか臺灣人とか、それからして東亞同文書院の卒業生と云ふものを使つて、數十年努力をして、それを完成した。完成してそれで死ぬ前年に滿洲に行きました。さうして支那人を集めて之を講習し、内地人も此の中に居りました。之を實際やつて見て非常に成績が好かつたと云つて兄は喜んで、來年はもつと行つて、來年再來年、自分の生きて居る間に此の仕事在完成して、さうして支那の國民に共通の國語を與へてやう。是は私の兄が死ぬ迄やりました。其の死ぬ時は兄は腦溢血に罹つて死んだのでありますが、其時に書いた絶筆があります。それにはずっと今のやうな事を書いて、自分は斯う云ふ事をやつて來た、是は完成した、さうして今年になつて實地に試みたが大變成績が好かつたと云ふ事を書きまして、さうして微意のある所を察せられたしと書かうと思つた時には逆もいけなくなつて、其の先が書けなくなつて筆を投げて殞れたのですが、所謂非常に大きな人類愛と云ひますか、さう云ふやうな考へを終始持つて居つた。でそれが唯だ何か氣紛れに、一時何かやると云ふことではなく、完成する迄は何處迄も行かうと云ふ考へであります。總ての努力をそれに傾注して行く、さうしてやつて行つたのだと私は考へて居るのであります。

私の兄は非常に氣の短い人間で、彼是と云ふと直ぐに腕力を出す、斯う云ふ風に云はれて非常な氣短かな人間だと云ふことになつて居ります。私は子供の時に、殆ど明治七年からして兄の膝下に居り、其後又東京に來ましてもやはり兄の家の玄關番をして居りましたが、幾度び毆られたか知れませんが、殆ど鐵のやうなものです。叩かれて／＼私は實は何と云ひますか、鋼のやうになつたかも知れません。どの位叩かれたか知れません。確かに能く腕力を揮つたのであります。自分の弟を毆り附ける、それは尤もであります。弟ばかりではないのです。實に自分の長官なども幾度びか毆つて居るのです。(笑聲)さうして同僚は無論のこと、殆ど伊澤と一緒に

に勤めて取つ組合ひをしない人間は無いだらうと云ふ位によくやつたのであります。或る時には品川彌二郎さんの農商務大臣の時でありましたか、大分昔の事でありますが、其の品川さんの書生をして居つた人の話であります。二階の梯子段からガタ／＼と何か轉がつて落ちて來た。どうしたのだらうと思つた所が、品川彌二郎さんと伊澤修二の二人が取つ組合ひをして梯子段の上から轉がり落ちて來たと云ふ逸話が残つて居るのであります。それだから詰り上だらうと下だらうと同僚だらうと、下の者とも能くやる。貴君方御承知か知らんが、私の同郷の者で法學博士の高橋作衛と云ふ私と殆ど同期の人間です。後に法制局長官になつたり、それから貴族院議員にもなつたりして遂ひ二十年程前死んだのです。私の兄が保證人をして居つたので、年にすると十五六も違ふのです。私在家へ歸つて見るとバタ／＼やつて、高橋作衛を振伏せてかうして上から頻りに毆つて居つた。

(笑聲)私は之をどう云ふ風に見るかと云ふと、私の兄の非常な熱、それからして人を差別的に考へない。上の人間でも同僚でも下の者でも喧嘩する。所が下の者とは多くの人は喧嘩しません。下の者だと云ふ意味で見下して居るからです。所が私の兄は非常に正直であるからして、自分より下の者でも自分と同等に考へるから、間違つた事があると直ぐ取つ組合ひを始める。(笑聲)さう云ふ譯です。それで多くの人は私の兄が非常な短氣者で無暗に腕力を揮ふと云ふやうに云つて居るけれども、是は私の兄の非常な熱、非常な愛です。それはどう云ふ風にそれを私説明するかと云ふと、例へば日本で啞に物を云はせたのは私の兄が初めです。吉川金藏と云ふ人を兎に角擲へて來て、私の兄は盲啞學校の校長でしたが、是は學校で教へるのでなく、所謂盲啞學校の生徒の内で比較的頭の好い者で、是ならば教へて出来るだらうと斯う云ふ風に考へて、さうして非常に忙しい中でありますけれども、一週間に二度かと思ひますが、自分の家へ伴れて來て、さうして非常な熱、非常な愛を以て之を教育しました。それで其の時には非常に氣を長くして、何時も能く腕力を揮ふ人間が、あゝ云ふ風に幾ら云つても分らない者を擲へて一生懸命にやつて居る。随分氣の長い人間だと思ひました。それが何年か掛つたと思ひます。二三年掛つたでせう。

到頭啞が物を云ふやうになりました。是はヴキジブル、スピーチ(視話法)と云ふものゝ應用でありますが、物を云はせた。吉川金藏と云ふ人は名古屋の人でありますが、名古屋に歸つて父母に向つて、「お父さん、お母さん、只今歸りました」と云ふことを云つた時に父母は慟哭して、實に有難いことだと云つて、生れながらにして物が云へなかつたものが、「お父さんお母さん只今歸りました」と云ふことを云つて呉れたと云ふので非常に感謝したのであります。兎に角人間を一人物を云へるやうにしてやつたので、子供が斯う云ふ風になつたと云つて實に慟哭した。さう云ふやうな人間であつたのであります。唯だ無暗と理窟無しに人を殴ると云ふのではなくして、殴るのは殴つて此の人間を善くしようと云ふ考へ、それからして正しい議論をして行く時には何處迄もやる。到頭今のやうに品川彌二郎さんと取つ組合ひをして二階から落ちると云ふやうな非常な熱を持つて居つたのであります。私は殴ることは決して好いことではないと思ひますが、男と生まれて其の位な熱が欲しいと思ひます。殊に今の世の中には斯様な者が欲しい。唯だもう自分の云ひたい事も云はずに、何處からか壓迫を受けると云ふと參つて、自分の一念と云ふものを發表することが出来ないといふ今の世の中です。私は今日の世の中を見て自分の兄を追想することは非常に深いのであります。

それから私の兄は精力絶倫と申しませうか、實に驚くべき精力家でありました。では非常の時に處すると云ふか、もう少し云ふならば日々處すると云ふこともなければならぬと思ふのでありますけれども、殆ど病氣と云ふことをした事がありません。さうして働く時には三日や四日は徹夜しても何等差支へないと云ふやうな非常に強い身體で非常な精力家であつたものであります。私共は終始接して居つて、朝は相當に早く起き、夜は大抵十二前に寝たことはありません。遅くなれば徹夜もします。それで自分の意見書などゝ云ふものは悉く自分で書いて提出して居る。是はまあ私が此處で御披露したやうな例へば音楽取調掛りと云ふ時代からして音楽學校長時代、長い間學校に居り、音楽界には多少貢獻をしたと思ひますけれども、其の時分の記録などが兄の家に保存してあるかどうか、恐らくも

う無くなつて居るのではないかと思ひますが、それは實に何と云ひますか、汗牛充棟と云ひますか、非常なものであるのです。悉くそれは自分で書きました。餘り人の手を掛けんと云ふやり方あります。段々時間が長くなりますから色々な項目に少しづつ觸れて參ります。

それから今日えらい喧しいのは思想問題と云ひますか、或は日本精神と云ひますか、さう云ふ事が近頃大變高調されて來て私非常に結構な事だと思つて居ります。私も全く今の國民精神の振興と云ふことに就ては同感であるのみならず、吾々共は數十年實は努力して來て居るのであります。是は私の兄が最も早く、最も強く主張した事であります。それは此の書物にも書いてありますけれども、明治二十三年に私の兄が國家教育社と云ふものを創立したのであります。で此の國家教育社の創立精神と云ふものに非常に力を入れたのです。さうして相當に詳しく國家教育社の精神と云ふものを説明して居る。國家教育社の要綱と云ふのに、例へば第一に忠君愛國の元氣を養成喚發すべきと云ふことを第一番の要綱に書いてあります。此の事の爲に私の兄が非常に長い間自分の大きな犠牲を拂つて、さうして國家教育社の爲に盡したのであります。で其の當時の大日本教育會と云ふものは、是は或る意味の官憲の背景を持つた半官半民のやうな教育會であつたのであります。それに對抗すると云ふ意味ではなかつたのであります。うが、兎に角此の國家教育社と云ふものを創めて、國家教育社と云ふものは名前に示す如く國家主義と云ふことを高調しまして運動をしたのであります。それが非常な大勢力になりました。それで結局後になつてから大日本教育會と云ふものも是と同化すると云ふか、此の趣旨を賛成して、二つのものが對立する必要はないと云ふので到頭是は合併しましたが、それが今日の帝國教育會と云ふものになつたのであります。近頃日本精神或は國民精神と云つて何か偉い大發明の如く世の中に之を振廻す人がありますけれども、さう云ふやうな事は珍らしい發見でもなくて、或る意味から云へば我が國は開闢以來、肇國以來の皇國でありまして、唯だそれが一時歐洲の物質文明を輸入するに急であつたからして、それで暫らく、何と云ふか、餘り云ふ必要はなかつたのですけれども、其の弊が現はれ掛つた時に

私の兄は、是は最早さう云ふことではいかんと云ふ考へからして、明治二十三年に今日やつて居るやうな運動を始めたのであります。さりながら私の兄は相當に廣い心持を持つて居りました。國家主義と云ひますか、國家と云ふものを無論第一に考えること、日本の國體の尊嚴と云ふものを尊重することは云ふ迄ありませんが、ヨーロッパでもアメリカでも良い所があつたら之を取つて宜いぢやないかと云ふ私の兄の考え方であります。それで音樂教育に就きましても音樂取調掛りで、詰り日本の固有の音樂であるとか、或は長唄であるとか、琴であるとか三味線であるとか云ふ日本の音樂を研究して、是は無論保存し且つ高調してやらなければならぬと同時に、西洋音樂と云ふものを是は好い所が多いからそれを取らなければならぬと云ふ考へ方からして、詰り日本の音樂の好い所は之を保存し、のみならず西洋の音樂の好い所を取入れやうぢやないかと云ふ考え方で、さうして今日に至つて居るのだと私は素人ながらさう思つて居る。大體兄の考え方はさう云ふやうな考え方をして居るかと思ひます。其の事は澤山私の兄のやつた仕事に就て御檢討下されば分ると思ひます。

大體さう云ふやうな輪廓を御話して置きますが、私素人でありますけれども、素人ながら兄がどんな風に音樂と云ふものを考へ、それから音樂と云ふものに盡したとか云ふことを門外漢として御話します。私の兄は先刻も御話しましたやうに、日本人は迥も音樂の能力が無いから免除してやらうと云はれた位な音樂に就ては無智であります。所がそれではならぬ、是非一つ日本人に音樂と云ふものを與へなければいかんと云ふことからして、そこで自分が歸つてからどうしたとか云ふと、自分が非常に尊敬したメーソン先生を雇教師として日本に招聘しました。さうして時の東京師範學校、今の東京高等師範學校の副校長と云ふ地位に居る。其頃でありますからしてそれでメーソン先生を招聘して來て、さうして學校に音樂と云ふものを正科として課すると云ふことを考へて、さうして東京師範學校の附屬小學校及び幼稚園に唱歌と云ふものを入れたのであります。其時に私は附屬小學校の生徒でありまして、さうして今日御出でになつて居るか知れませんが、幸田延子さんなどと一緒に、其の時分は男女一緒にあつたと思

ひますが、それでメーソン先生からして唱歌の直傳を受けたのであります。(笑聲)其時にメーソン先生の通辯を爲さつて下さつたのが後に高嶺さんの奥さんになつた方で吾々は「春の彌生の曙に」とか、「螢の光」とか、私は直接メーソン先生から唱歌と云ふものを學びまして、其方では吾々が大學などに行つても若くは高等中學、今の高等學校ですが、私が唱歌の先生でした。

それから私の兄は丸きり音樂と云ふものに何も智識が無かつたのですけれども、私は子供の頃の事を覚えて居るのに、琴を山勢松韻先生に學びました。怪しげながら琴を弾きまして六段位はどうやら弾ける程度になりました。

それからオルガンを、其の時分にはオルガンと云ふものは日本に幾つといふ位しかなかつたのですけれども、オルガンを買つて來て、さうして單音だけならばどうやら弾ける程度になつて居りました。それで例の紀元節の歌「雲にそびゆる高千穂の」あれは私の兄が作曲したのであります。其時に私は兄の助手に使はれました。兄が之を作曲してさうしてオルガンで弾いて私に歌はせるのであります。私の方が兄よりうまいのですからして歌つたのですが、(笑聲)所が一と所兄がオルガンを弾くけれども、私が自然に歌つて行くと云ふとどうしても兄の弾いて居る譜と違ふのです。さうして兄が何遍もやらして見た所が、お前の方が好いかも知れないと云ふ譯で、(笑聲)成程お前の方が自然だと云ふ風なことで、私の歌ひ方を採用して呉れまして、それが何處の所であるかはつきり記憶しませんけれども、兎に角私が紀元節の歌の一部分だけ作曲した。(笑聲)斯う云ふ誇りを感じて居る次第であります。

それから貴君方に私の兄が音樂學校の校長としてどんなに盡したかと云ふことを申上げることは是は殆ど釋迦に説法で、さう云ふやうなやば臭い事は申しません。私の兄は音樂學校の校長として音樂教育と云ふものに非常に努力したと云ふことと同時に、音樂其物を國民の間に普及し、さうして發展さすると云ふことに就て非常な努力をしました。それは大日本音樂會の創立であります。是にはやはり相當な有力な人々の賛成を得なければ

ならぬと云ふことからして、其の時分には富豪と云ふものは餘り世の中になかつたし、大してさう云ふ者を尊敬しない時代ですからして、華族の内の地位の高い人々、それからして役人とか大臣とか云ふ連中です。さう云ふ者を説いて大日本音樂會と云ふものを作つて、是は確か會長には侯爵の鍋島直大さんがなられて居つた事があるのではないかと思ふのです。さうして月に一遍であるか二た月に一遍であるか知らないけれども、年に數回音樂會を開いて、さうして所謂國民の間に音樂と云ふものを普及させると云ふことに非常な努力をしました。是は相當長く續きまして、今でもあるかどうか知りませんが、少なくとも最近まで相當貢獻して居つたのであります。

私が其頃の事で臚氣な記憶は、大日本音樂會の主催と云ふか或は後援と云ひますか、此のホールが出来た時にコンサートがありました。さうして私は切符を貰つて來たことがあります。此ホールは明治二十三年とかに出来たですからして、或は其の時の演奏會ぢやないかと思ひます。其時の私の記憶からすると、實に私のやうな何も音樂に關する智識の無い者であつたけれども、實は門前の小僧習はぬ經を讀むで、私には非常に愉快な氣持がしたのです。能く兄が話したのですが、自分が大日本音樂會で演奏會をやつて西洋音樂を紹介した、其時エツケルトとかソブレーとか云ふような人が來て、さう云ふ人が中心になつて西洋音樂をやる、それから立派な紳士が澤山來て聽いて呉れる、そこで今日の音樂で何處が好かつたか。初めに來てやる所が一番好かつた。さうか何處だ。大勢出て來てピン／＼／＼頻りにやつて居る、あれが一番面白かつた。所がよく聞いて見ると初めの調子を合せて居る所なのです。(笑聲)それが一番好かつたと云ふ。まアさう云ふ程度のものであります。それは立派な大臣とか、やれ華族さんとか、其外金持ちもちつとは來たかも知れませんが、さう云ふ日本の所謂上流社會の人が來た。其の大日本音樂會の切符は其の頃の五圓位で今はそれが百圓位になるでせう、非常に高い切符です。さうして音樂を普及しようと云ふ考へですから、聽いて何處が好いかと訊くと調子を合せるのが面白かつたと云ふ、斯う云ふ時代であつたのです。それを兎

に角非常な熱と非常な努力を以て開拓して、さうして今日のやうな隆盛になつたのであります。私自分の兄の事を樂屋から褒めて甚だ可笑しいのですけれども、私はさう思つて居ります。

私は最後に申し上げますが、無論音樂と云ふことに就ては、又音樂教育と云ふことの爲には私の兄が相當に盡し且つ貢獻したと思ひますが、是は實は私の兄の大きな人格の一つの現はれであります。私は七十一の年になつて兄と云ふものを追想して見ると實に非常な人格者である。之を若しも政治家に移しますならば、總理大臣位にはなつて何等差支へない。之を又外の方面に使ふならばどんな事でも出來たのだと云ふ風に考へるのであります。で私は結論だけ申しますけれども、教育家と云ふものは大人格者、もう少し違つた言葉で云ふならば、例へば孔子とか孟子とか云ふやうな人が是が教育家で、是は大人格者で又大爲政治家であります。聖人と云ふ言葉を使ひますが、大爲政治家であります。大爲政治家が大教育家である。さうして大爲政治家と云ふものは大人格者であらねばならぬ、さうなるのであります。所謂學校で以て生徒に教へると云ふことはそれはさう云ふ形で現はれて來るのであつて、其の人の人格と云ふものゝ反映すると云ふことに依つて教育と云ふものゝ効果が遂げられるのであります。それで私の兄の如きは大人格者であり、一面から云へば大爲政治家であつたが、次に大なる音樂教育家であつたのであると斯様に私は思ふのであります。〔後略〕

鈴木米次郎

私は只今御紹介下さいました東洋音樂學校に居ります鈴木米次郎であります。第三回の卒業生でございます。學校の名簿を見ますと第三回は高天原にでもあるやうな風に、神代の人のやうに書いてある。音樂取調係出身とか何とか書いてあるやうですが、私はさうではありませんで、やはり東京音樂學校の第三回の卒業生の免狀を頂いて居るのでございますから、茲で私から訂正することは可笑しいけれども、學校の御當局の方にそれを申上げて、何だか神代の人のやうに考へられると大いに若返りたいと思ひまして段々年を取つて行くやうに思つては甚だ残念であります。

今日は丁度昨日校長から、伊澤多喜男先生が見えて伊澤校長の御話をし
て下さるさうであるから出て其の當時の思ひ出を話せと云ふ御懇切な御手
紙がありまして、どうも色々考へて見ましたけれども、斯う云ふ大家、我
が國の教育の大家であらせられる伊澤先生のやうな、我が國の維新以來我
が國民教育に偉大なる貢獻を致された先生の思ひ出を語ると云ふことは餘
りに大きな事で、未だ私の先輩も澤山居りますのに、私が差出がましく出
ると云ふことはどうかと思ひまして、一旦御斷りをしようと思つて居りま
したのです。所が斯う云ふ大家を自分の先生と仰いで教へを受けたと云ふ
ことは今から考へますと實に名譽の事だと思ひまして、又思ひ直して厚顔
ましくも今日出た譯でございます。又先生の事を申し上げると或は自然自
分の事を上げるやうなことになります、或は自己宣傳がましい所も出
て参りませうと思つて居りますが、是は御容赦を願ひたいと思ひます。

實は私も思ふ所がありまして明治十九年に音楽取調所に歐洲管絃樂の傳
習生として入學を許可されたのであります。明治十九年と申しますと餘程
前の事であつて、伊澤多喜男先生の今の御話を伺つて見ますと、是は最も
古いのでありますけれども、亦随分古い事でありますから一寸考へまして
も汽車は未だ上野の下には無い時代で、無論電燈も電話も無い時代であ
ります。皆徒歩で歩かなければならないやうな時代であつて、東海道も汽車
は國府津邊迄きり無い、其の先は無い時代の事でございますから、我が國
の教育も文化も實に程度の低かつた時代だと思ふのであります。其の取調
所は何處にございますかと云ひますと、丁度上野公園の電車の終點の公園
口の所を入りました所で、あそこは高い所で、兩大師の所に至ります所
でずつと見晴しになつて居ります。あそこは樹木鬱蒼として古狸が棲むかと
云ふやうな時代であつて、あそこは外國の教師の官舎が五六軒列んで在
りまして、其の一番最初の所に昌平館と申します建物がありまして、其處が
音楽取調所でありました。殆どあの邊はもう晝猶ほ暗いと云ふやうな鬱蒼
とした所で、此の邊は又藥原であつたのであります。藥草を植ゑて置いた
所の場所だと記憶して居ります。僅かに此の角に昔の墓が残つて未だにあ
るだらうと思つて居りますが、さう云ふやうな淋しい所であつたのであり

ます。

でさう云ふ所で授業を先づ受けまして唱歌を初めて習つたのでございま
すが、私は違つた方面から入りましたから全く學校に入つてから音楽を學
んだのであります。其の當時は1234と書いてヒフミヨと云つて歌つ
た。後で又其の事に就いて御話し致しますが、123と數字を書いてヒフ
ミと云つて歌つた。是は伊澤先生の御考案であつたのであります。誠に歌
を歌ひますのには都合の好い事で、數字の勘定で音が高くなつたり低くな
つたりして行くと云ふことは考へても面白い。それから又半音をちやんと
歌ふ。今は半音の名稱が無いが、ヒト、フタ、ミヨ、ヤイ、斯う云ふ風に
半音をちやんと歌つて行くやうになつて居つて、中々教授方法から考へて
見ましても凝つたものである。そこで其の稽古を致しました時には始終立
派な紳士が正装をして臨席されて居る。唱歌の時と云ふと必ず臨席され
る。初めは誰であるか分らなかつたのですけれども、所が分つて見るとそ
れが伊澤先生であつて、伊澤先生は必ず其の席に居られて新入生の聲を始
終検査されて居つたのであります。誠に今から考へて見ますと云ふと、校
長御自身が來て初めて入つた生徒に試験をされて居る。誠に恐縮の至であ
つたのであります。

それから段々色々の稽古がありまして、オルガンの練習を始めました時
分にやはり唱歌が聞える。其時やはり同じ聲で以て御話がある。後で訊い
て見るとそれは新曲の試演ださうです。新しい歌を生徒に歌はせて先生が
御自身で以て検討して居られた。又或る時は五六人寄りまして音楽を合奏
して居る。所謂清樂を合奏して居る。其の時分は支那の音楽をやつて居ら
れたのです。其の研究もやつて居られた。能く先生は直接さう云う事をや
つて居られる。時間がございませぬやうでございますから簡單な事を省き
ますから齒の抜けたやうな事になるかも知れませんが、其頃又竹の之臺と
申しまして、今の美術展覽會のある所に共進會と云ふものがありまして、
天皇陛下が行幸になり、私共もやはり先生に伴れられまして其の場所に参
りまして新作の歌を歌つた。是は陛下の上聞に達するやうにと云ふので、
先生御自身で生徒を伴れて行かれ、職員も一緒に往つて歌つた。陛下が遙

かに御廻覽になります後姿を拜しながら歌つて居つたのです。實に恐れ多い事でありましたが、伊澤先生はどうかして音楽の位置を高め、さうして普及をさせると云ふことを非常に御苦心になつて居られたのでありますから、凡ゆる機會にさう云ふやうな色々な事を御考へになつて、生徒を伴れて行つて、始終成るだけ上流の方面、又有識者の集會の場所に常に伴れて行かれて、さうして一方に於てはさう云ふ行儀作法を生徒に教授されまして、他方面に於ては音楽の發展を考へられて居つたのであります。誠に今日其の事を考へますと云ふと、先生の御苦心と云ふものは實に涙のこぼれるやうな御働きであつたのであります。其の後先生は又日本音楽會と云ふのを鍋島侯爵と、今一寸伊澤先生から其の御話がありました。あの會を御拵へになつて、さうして常に吾々共を演奏會に御引伴れになつて、歌を歌へる者は其處の中で働くこと云ふやうな風に色々な社會の教育をされたのであります。誠に其の當時は社會の有様と云ふもの、又交際社會の有様と云ふものは實に程度の低いものでありまして、指導者がなければ高貴の席に出ると云ふことは中々難しかつたのであります。先生はさう云ふ事にまで生徒を誘導して下さつたのですから、誠に後では幸ひをした事が澤山あつたのであります。

丁度私は二十一年に卒業致しまして、直ぐ様講習に出ると云ふことで、田舎の講習に参りまして歸つて参りまして報告を致しますと、先生は是から私に神奈川県師範學校に行けと云ふことで私は無論東京に居る者であつて、田舎に行く事は望まないと云ふと、先生は一言、口答をせずに直ぐ神奈川県に行けと中々烈しいのです。それで横濱と云ふ所は自分の教師のソープレット、その居る所であつて、外國人も澤山居るから、當時私は英語の方もやつて居るので、英語の研究にもなるけれども、あそこは英語の音楽の教師が居るからお前に一番適當だ、校長に約束してあるから直ぐ行けといふので、はいといふ譯で、近いか行つたり來たりして居りました。所が二十二年に憲法の發布がありまして、こちらの學校では色々準備を爲されて居る。私の學校の方でも東京から通ふのだから東京と打合せをしろといふので打合せをして居りました。丁度其の時分に、外山正一博士

が萬歳を唱へるといふ事を始められて、其の稽古をした。さうして稽古をしたり、こちらの先生をして居た坪井玄道といふ人が指導者となつて其の練習をやり、さうして初めて憲法發布の時に、二重橋の前で、陛下を迎へ奉つて、さうして丁度其時國民皆兵といふことがあつて、皆制服が一定され、學生服を學生が着て、今の金釦で各學校の生徒が整列したのであります。其時に特に差許されて青山の練兵場で觀兵式の拜觀したのであります。其日は泥濘の非常に悪い道でありましたが、其道を陛下の齒簿の後を驅けて参りまして、さうして拜觀したのであります。丁度其時から初めて例の萬歳々々といふことが始められたのであります。そこで其年の暮であります。憲法發布が過ぎましてから後、直ぐ伊澤先生から私に東京に歸れといふことで、私は喜んで参りました。さうして第一高等學校に行けといふ。あそこは惡戯の學生が居て難かしい十分やれ。其時にはその多喜男先生も生徒であつて暴れた方であつたのであります。中々管理が行届かないから、どうもうまく行かないからあそこへ行つてうまくやれと云ふ。それから自分も其氣でやりまして自分の友達が生徒になつたものだから、家に歸れば友達である。學校に行けば生徒である。其の當時はまだピアノが無く、オルガンを理科大學から貰つて來まして、それで稽古をしました。所が教材は何かといふと小學唱歌集三冊、それから祝祭日の歌を稽古しろ。其の命令以外の教材を使ふと大目玉を被むるので仕方がないが、是は學科が違ふから法科も居るし、佛蘭西語の生徒も居るし、英語の生徒も居る。各國の言葉で教へた方がよいだらうといふので、それを其の國々の言葉で教へた。生徒の方では言葉に釣込まれて知らず知らず歌を憶えて行く。日本語の歌は歌はない。西洋の歌を歌ふのですが、其の方が便利だらうと思ひまして、伊澤先生には内密でやつたのであります。それが大成功を収めまして、そこで音楽ファンが出来まして、段々うまく行く様になつて來ましたが……餘り時間が長くなりますのでこれでは中止致しますが惡しからず御容赦を願ひます。伊澤先生の事を申し上げるには、中々一時間や二時間は愚か三日か四日かゝると思ひますから、大勢先輩の御方も居られますので御勘辨を願ひます。

永井幸次

私は丁度伊澤先生が御辭めになった翌年入つて來たので、先生の授業は受けませんでしたけれども、在校中に三度程先生に接したのです。それで私のクラスに河野虎雄といふ江戸つ子のちゃき／＼が居りまして、其頃の學生の間には随分劍舞をやる事が流行つて居つたのです。私等も河野と二人で神田の錦輝館に行つて劍舞を見たり詩吟を聴いたりしましたが、それから歸り途に河野君が、唱歌に一つ劍舞の手を付けて見ないか、それは一つやつて見ようといふので、私は其時河野の家に居つたものですから、河野の家で、二尺差を腰に差して、「敵は幾萬」を私がオルガンを弾いて歌つたのです。それに合せて河野が劍舞をやつて見た。それが何うも面白くない。(笑聲) それから日本少年の歌といふ歌の曲で歌つて居りますあの曲に、破邪曲といふ歌が山田美妙齊の作で出來て居る。それを弾いてやつた所が、とても面白く合ふのです。それで夜下タンバタンやつて居つた所が、河野君のお母さんが上つて來て、面白さうだから刀を出して來てやるといふので、河野のお母さんが刀を出して來て、私がオルガンを弾いて、劍舞をやつた。とても面白いのです。丁度其事を翌日鳥居先生に話した所が、一つやつて見いといふ事で、下の部屋でやつたのです。刀が無いのでステッキを持つてやつたのです。さうした所が、是は面白いと、大いに鳥居先生は賛成された。此時に翌日帝國教育會の發會式か何かあつたのです。それは明治二十七年でしたから、日清戦争が始まつた時で、此所で三日ばかり大會がありました。其の大會で湯本武比古といふ方が講演された後で、其の劍舞をやつて見せて呉れといふことで(笑聲)それから河野がやつたのです。所が非常な喝采だった。(笑聲)所謂劍舞の格好で、襷を十字にかけて、白鉢巻をして、股立をからけて、前奏から弾出してやつた所が、とても面白くいつた。鳥居先生も其の前日、刀の扱い方のすべ、鞘に納めるすべも知らぬのだかといふので、鳥居先生に、教育會の幹事の方に居合抜の名人が居るから作法を習へと云はれて、前の日に下の室で一時間習ひました。其人が歸つてからも河野が頻りに練習して、其の翌日發表した譯です。それが非常な喝采を博したものですから、あちこちから來た教育家

が見て歸つて、忽ちそれが流行したのです。それが劍舞附の唱歌であります。それが後に體操唱歌になり、それから段々變化して今の童謡舞踊になつて來て居る譯です。色々な變遷を見ますと面白いのです。それで其の教育會でやつた時に、其の河野と私と關根といふ人が同じクラスでピアノを弾いたのですが、其の三人が歸らうとして玄關の所に來ますと、鳥居先生が一寸待てと云はれて、私等三人を、伴て行く所があるから來て呉れと云はれる。それから行つた所は上野の廣小路の所で、何所に行つたか今覚えませんが、何でも料理屋に伴れて行かれたのです。それで後から教育會の幹事連が見えまして、私等は鳥居先生の傍で小さくなつて居りましたが、さうする内に御馳走が出來まして私等學生としては珍らしい御馳走です。……まあ大した御馳走でもないが學生としては珍らしい御馳走です。……で食べて居つた。さうして私等三人が坐つて居る前へ伊澤先生が來られてドカツと坐られた。紋付羽織袴で來て居らつしやつたのです。さうして劍舞を先生が非常に褒められた。それで好い事を始めて呉れた。新機軸を創つて呉れた。之を益々研究して呉れる様に(笑聲)……やがて發展したらば日本のオペラになるだらうといふ様な事で、私等も非常に喜んで、鳥居先生も居合抜の稽古までしたといふ事を話されて、非常に喜んで下さつた。益々研究する様にといふ事でしたが、それから段々様子を見ますと、東京の師範學校の生徒が翌年の會には、「敵は幾萬」に手を付けて出して居つた。あちこち小學校の生徒などが、「朝日に匂ふ山櫻」といふ様な歌に手を附けたりしてやつて居りました。さういふ様な事で、是から童謡舞踊に變化したと思ひます。もう一つ御話したい事は、或日の事私等クラスの者が、盲啞學校に、伊澤修二先生が今日はいらつしやる日だから生徒を伴れて來いといふ事で、多分其時は小山先生の引率であつたと思ひます。先程伊澤多喜男先生から御話がありました様に、丁度伊澤先生が教育なさつた啞の生徒を舞臺に上げて、其の啞の生徒と問答をなさつたり、啞の生徒に「君ヶ代」を歌はせなさつたり、それから其の生徒に演説をさせたりなさつたのです。實に明瞭で、それはもう驚いたのです。それで啞の生徒と先生が問答をなさつたり、先生が云ひなかつた事を口眞似させたりして、

色々の事を實驗して見せて下さつたのですが、其の生徒が一寸間違へますと、生徒の手を取つて、喉の所に手を取つて、喉に手を當てゝ聞かせなさる。さういふ時の態度を見まして、實に温情の籠つた親切な教授の仕方であると、私はしみじみ其時に感じたのです。あゝいふ風に不具の生徒を導くには本當に親切と努力と熱を以てやらなければならぬものであるんだと思ひました。又此の學校ばかりでなく、東京の盲啞學校、或は吃音矯正、さういふ様な事で澤山の人を御救ひになつて居るといふ様な事を考へます時に、本當に先生は大教育家であつたといふことを思ひ、吾々の母校が其の先生の御仕事の一つであつて、吾々は其の恩恵に浴して今日あることを得たのであるといふ事を感じまして、何處までも先生を思ふと共に、此の母校の發展を祈りたいと思つて居るのであります。詳しい御話をしたいと思ひましたけれども、時間がありませんから是で失禮させて頂きたいと思ひます。

『教育音楽』第十八卷一号、昭和十五年一月

山勢松韻(やませ しょういん) 旧名慶賀一、東京府平民

履歴(要約)

弘化二年(一八四五) 七月二十八日東京市下谷區仲徒町三丁目三拾貳番地に於て生。

嘉永四年(一八五二) 六月五日故山勢檢校慶風一に就き拾七年間箏曲修業。

万延元年(一八六〇) 四月十三日山清勾當慶賀一と称し箏曲指南を始め。

明治元年(一八六八) 二月十三日先師山勢檢校死去に付同家を相續し松韻と改名す。

同十三年(一八八〇) 六月七日音楽取調として出勤に付為手當一ヶ月金拾五圓。俗曲改良を担当。

同十四年(一八八一) 五月十八日音楽取調掛御用掛申し付けられ、取扱判任に準し月俸金貳拾圓。

同十五年(一八八二) 九月十三日自今月俸金廿五圓。

同十七年(一八八四) 二月五日職務勉勵候に付為手當金貳拾五圓を受く。

同十八年(一八八五) 三月三日自今月俸金三拾圓。

同十九年(一八八六) 一月二十一日依願御用掛差免。同日音楽取調掛雇申付月俸金廿五圓。二月十日訓育啞院兼務申し付けられる。

同二十年(一八八七) 二月二十二日訓育啞院雇申付月俸金拾八圓。三月三十日東京府廳より工藝品共進會審査員を依頼される。

同二十二年(一八八九) 一月二十四日明治二十一年十月中大須賀万和外四名と申合せ養育院へ施入の目的を以て井生村棲に於て琴曲合奏會を催し該收入金百七拾圓同院へ寄贈候段奇特に付為其賞木杯壹個下賜される。

二月二十二日箏曲集第貳編樂譜校正を囑托される。三月二十九日箏曲集第貳編樂譜校正を囑托され手當金拾貳圓を受く。

同二十三年(一八九〇) 五月新築校舍開校式に自作の《都の春》披露する。

同二十四年(一八九一) 四月十七日東京音楽學校教授に任ぜられる。同日叙奏任官六等。同日年俸金百貳拾圓下賜される。同日當校盲生彈琴教授を囑托され一ヶ月手當金拾圓を贈られる。

同三十三年(一九〇〇) 東京音楽學校退職。

同四十一年(一九〇八) 九月九日没す。

作曲作品

《朧月》《花の雲》《松島八景》《四季の友》《新年》など。

山勢松韻の紹介文(『音楽雑誌』第三十二号、明治二十六年五月)

正八位山勢松韻君之履歴

君は幕臣吉田義方氏の男にして弘化二年七月廿八日江都下谷仲徒

士町に生る三歳にして明を失ひ姉某の手に養育せられ五歳の時自ら

箏の調子を合せ人をして其敏捷に驚かしめたり君が性として常に遊

戯を好み或は火の見臺に登りて風を揚げ或は塀を渡る等毫も常人に